

特 105

714

世界の
大帝国の
三大國寶

萬國平和協賛會出版



始



世界の
平和を
帝國の
三大國
實現

萬國平和協贊會出版

~~1918~~

特 105
714



緒言

大倭日高見國は上つ代より言靈の幸ふ國、言靈の所佐國、の稱ありて、天つ日の、日の本つ國、日の御子の知せる國にて國旗も、日の御旗なり、言靈も、日の御分靈なり、火は殺伐の金氣を克す干戈を終熄せしむる所以の理に當り御國も大和と稱へ、世界の平和に貢獻す大使命は已に我皇國に下たれり、
天日の全世界に亘りて照臨せざるなきが如く、大御旗を平和の風に翻して世界に臨まば世界に國を爲す國と云ふ國は皆我皇風に靡かずして有る可きか。

大正
10 6 15
内交

天津日のかけもたふときはたかせに

なひかぬくにはあらしこそおもふ

全世界十七億の彦と姫との爲めに、日の木つ國の、大御旗を振り挿頭して立てよ、我同胞八千萬の彦と姫達は

世界の平和と帝國の三大國寶

皇國は五千年の昔吾人の遠祖八百萬神等か神集ひに集ひ給ひ神議りに
議り給ひて畏くも皇孫は豊葦原の瑞穂の國を安國と平けく知召せと言寄
し奉りて出雲政廳より大政奉還となり天壤無窮の御神勅と共に天孫降臨
となり上に三種の神器を立て、天の御柱として下に三種の國寶を据えて國
の礎とし天神地祇を祭り茲に大倭日高見國が生れ出でにき、中世以降浮
圖の渡來するや天下の蒼生は所謂說法なるものに惑ひて天神地祇の大祭
をも忘るゝ迄に彼の偶像を禮拜するに至りて隨神の道全く杜絶し地の礎
なる三種の國寶は蹂躪せられて妖雲低迷天日暗く魍魎魍魎出沒して弑逆
の大罪を犯すあり、王位を覬覦するあり堂塔伽藍を建立して巨億の國費
を靡爛し國用窮餓孳途に充ち災殃瀕りに起り劍尖閃き鎌倉山の星月夜
の光り荒ましく宮處の夜嵐江戸の東の空に夜の明け放るゝまで千有餘年

にもやあらん長夜の夢全く醒めて東野陽炎立所見而明治の朝日子を仰く
神代とはなれり。
現神の知召さるゝ大御世に復りて茲に大正十年と云ふ年を迎へり第二の
大政奉還より五十有餘年の星霜を閲みするに拘はらず螢光蠅聲未だに跡
を絶たず惟神の大道なる三大國寶は醜草の爲めに蔽はれたり、いで醜草
の根を掘り取り除きて國寶を世に出し併て世界の平和に貢献せんとす、
三種の大國寶とは、一、言論 二、姫 三、榮水。

言 論

言論は皇國の礎にして三大國寶の一なり、出雲政廳か得爲剝ける世の大
政を奉還し、天つ日嗣の知召す大御代となり、天壤無窮の國体の基を樹
てられし、御鴻業を翼賛し奉りしは、吾人の遠祖の公論に由りて、奉
對せられたるものにして、上つ代より言論自由の國、言靈幸國、言
靈所佐國、この稱ある所以にして言論の貴重なる素より論を俟たず、苟
も言路否塞するときは人心背反し確執を生し其極腕力となる、言論は惟
神の道にして腕力は勿論人道にあらず、禽獸を距る遠からず。
然るに宇内の形勢は如何、列國が競ふて民力を靡爛し、國帑を傾けて師
團の増設艦隊の擴張に日も又足らざるもの、如し、内治外交一切萬事軍
隊の後援なくんは其國の權威なきもの、如く列強との對峙にも、脅威に
も、壓迫にも、備ふるに軍隊なりとし、天下を舉げて軍備を高唱するに
至れり、必竟如斯は、言靈の幸ふ國たるを忘れて言論を無視するが爲に
は非らざるなきか、我皇國は言論の礎の上に建設せられたる國体なるを
以て列國の腕力主義に雷全して、軍備を充實するの必要なき而已ならず

強て國帑を傾け尨大なる軍備を充實せんごせは、建國の精神に戻り吾人の遠祖の御心に副はざるに非らざるなきか、或は曰く軍備擴張は宇内の大勢なり、滔々たる大潮流なり、此大勢力、大潮流に反抗すること能はずと、何ぞ然らん之れ等は所謂事大思想に捕はれたる者の言のみ、大勢何にか有らん、大潮流又恐るゝに足らず、世にはこの大勢力この大潮流の上において、之れ等を左右する大威力のものが有る、大威力とは即ち宇宙の大靈である國にも國の靈あり、我皇國の大靈を便宜上五行に配して言はゞ、水、木、火、の三行にして、此三氣が旺相する國柄なるを以て、我國の森羅萬象、皆此三氣を稟有せざるはなし、我民族の精神氣象より体格に至る迄歐米人とも異なり、支那人とも、印度人とも、同一ならず、隨て歐米人魂、支那人魂、印度人魂、日本魂とも均しからざるは皆これ其國靈氣の相違する所以に外ならず、水木火三大靈氣が旺相する大和民族の精神氣魄は水の精力、木の決斷力、火の氣力、此三氣を主として居るから所謂大和魂とは精力、膽力、氣力この三靈氣の結晶である。

上代より皇國の權威は、言論に有り、言靈の幸ふ國柄なる所以は、精力の水より、決斷の木を生し、又決斷の木より一層勢力を加へて、氣力の火を生ず、氣力は心火、舌火に活動して言靈に現るゝのである、又此三氣の中心は木にして木を我とせば、我を生ずる水は親の理にして、我が生ずる火は子なり、我木の敵は金なり我を害ふ金氣は又我子の火には破らるゝ理にして即ち、言靈はこの肝木より生せられたる舌火である、言靈の幸ふ國とは之が爲で、一身の面目、一家の保全、一國の權威も一に係りて、言論に有るのである。

上述の如く眞理上我國は言論萬能の國にして尙武の國にあらず、黃金國にもあらず、某々の如く一代巨億の資産を造り、礦山成金、船成金とか破廉耻と言はれ、不徳義と呼ぶゝも馬耳東風で直向黄金を山と積むをば成功者の如く言ひ觸らすものあるも之れ等は外つ國振で國風には反りが合ぬ。「西郷翁のうたに」

◎位山登るもくろし
老の身はふもこの
ささそすみよかり
けり

あな嬉し直日の神のちはひかも

一夜のうちにまこゝろのたつ

直日の神の幸ふ西郷翁は子孫の爲めに美田を買はず又板垣伯は二代華族を辞退したるが如き皆是れ皇風である文臣錢を愛し武人にして命を惜むものは支那人に多しと聞けり又支那の官吏は自己の財囊を肥やすことをのみ念頭に掛けて天下國家の安寧幸福を顧みるもの少なしと聞けり、我國の官吏にも之れに類似の者あらんか、俸給を十二分に取れり其上爵位、位記、勳章を受け尙其上にも軍艦を呑み、汽船を呑み、水力電氣を呑み、鐵道を呑み、鑛山をも呑む、上代稻田姫を呑まんとして素盞雄尊の荒靈に觸れて失せたる八頭の大蛇の子孫とも云ふべき者が出で、天下を我物顔に獨り占に爲んとするから其反動として社會主義とか共產黨とか所謂危険思想なるものが現はれて來るではないか。

源義公が大日本史を編纂せられし功勳を愛でさせられ從三位の官位を御宣下になられし折り辭退せられしは普く世の人の知らる、通りである、

◎皇國ノ官吏ハ知シ
召ス大御代ニ奉仕
スルモノデアルカ
ラ「うしはく」封建
時代ノ上官ニ厚ク
下官ニ薄キ俸給制
ヲ踏襲スルハ大ニ
不可ナリ

公は大日本史編纂に當り國學者を各國より招致せられ、三十五萬石大半の費用を投じて編纂に従事せらる、に當り、上代に於ける出雲政廳が大政奉還の際に於ける行に於て………本家の徳川征夷大將軍が天下の政權を掌握しつ、あるは、皇國の國体にあらずとし、所謂太義名分を明かにせられ、一朝天下に一大事件の起れる場合に於ては、本家を向ふに廻はしても、朝廷の股肱たる可きを忘る勿との遺言迄せられて有りしより、水戸藩の浪士が夙に勤王の大旗を翻して幕府と戦ふ魁となりしは此遺訓に基きしものである、維新前の水戸の浪士が天下の爲めに供せし犠牲は實に莫大のものである、斯の如く公の大忠誠は言語に筆紙に盡し切れぬ、大忠臣の公は從三位の官位をすら辭退されて居る、菅公も關白職の御内命を辭退された、賜はるものなら、太政大臣でも、正一位でも、大公爵でも、重ね返辭で貰ふと云ふは國風にあらず、役人として大御代に奉仕するからには、位地職掌に差異あれども俸給に甚しき差等を設くるの必要を認めぬ、然るに封建時代を踏襲して猶且上官は一萬圓、中官

は二千圓、下官は二百圓、と云ふ如く俸給に多大なる等差を付するは何故なるか、地位職掌に由りて難易あり、人物の優劣、勞苦の多少、職務の繁閑等に由りて俸給の等差は免かる可からずとせば、役人も職工や、藝人や、稼人と毫も撰ふところ無きにあらずや、而して職工、藝人、稼人は日當の外官吏の如く勳章、位記、爵位の恩賞に預かる者は實に稀なれば、職工長や藝人の親分は給料の外には僅かな祝儀位の收入に過ぎぬから、親方と弟子とが給料の相違あるは至當ならんも、夫れすら役人の如く四十倍も五十倍も附け出して取つては居らぬ……役人には上、中、下、の數段に階級ありとするも均しく大御代の祭事に奉仕するものなれば、職掌位置に相違あり、事務に繁閑あり、勞苦の多少あるも俸給には甚しき差等を付するの要なし、夫れが爲めに勳章、位記、爵位等の制ある所以であるから、或は徵兵と全じく無俸給にて奉仕するも差閥なかる可く、上官は必ずしも肥馬に跨り又は自動車を驅つて登廳せざればならず、下官は必ず腰辨で手繰つて登廳するものとも限らず、上官も綿服で

木履で腰辨で登廳するも政事を扱ふ妨げにはならぬ、却て勤儉の美風を示さるゝにあらずや天下をして浮華に陥らしむるも質素の風習に導くも人を殺すも活かすも一に係つて上官にあり、上官を一般が見習ふにあらずや、此故に宰相が愛錢家なれば天下は皆黃金熱に罹りて不徳義、破廉耻を顧みずして金錢を得んとし、上官が錢を愛せざれば人の衣を剝くごとき痴者は現はれず……上官、中官、下官と均しく大御代に奉仕するものにて衣食の稼きに勤務する稼人とも異なり、藝人とも、職人とも異なつて居るものなれば手當てなる俸給に甚しき區別せずとも可ならずや、衣食の爲めの稼人ならざれば上官が下官の五十倍にも當る給料を得て贅澤三昧に日を送り國政を余所にして、浮華淫蕩の風を助長せしめ延いて國家を賊するものゝ如きは、大御代に奉仕する役人としては受取り難きには非らざるか……支那や歐米と國体を異にせる皇國の官吏は、一般に地位の上下、職務の繁閑、勞苦の多少難易に關はらず、其の俸給に甚しき差等なき筈である、若し然らずして大等差あるは恰も商品の良否により

◎平田先生ノ歌ニ
風さなりあるは雨
さも降り去きて神
代の道に身をやつ
くさん

て定價を付するに異ならず、一萬圓なり、二千圓なり、其定價通りで取引は充分で外に一物を添ふる必要なし、定價の本俸と云ふ代金を受領するからは、此上に、位記、爵位、勳章等を辭退すべきかおほみでより皇風である。取れば貫はず、貫へば取らざるが國風で品代金を受取り、其上珍品を貫ふが如きは支那風である。本俸を受けて其上に勳章や、年金や、位記や、爵位を拜受するは取る外に貫ふのである、取れば貫はず、貫はぬから取る、本給で充分に取つて居るのだから此上貫ふは封建時代の剝く理にあたる本俸を受けずに、爵位、勳章、を拜受したる向は別とし、然らざる向は全部之を奉還せらるゝか、皇國上代の風俗である。元老とか、大官とかの中には、幕末の勤王家も少なからぬ様に承はる、全しく幕末勤王家の中でも、舊水戸藩の浪士は勤王黨の魁である、この浪士は勤王の大義に立たんが爲め代々の食祿を抛つて王事の爲めに、食祿と父母妻子を棄て、已れば目と鼻と口から火を吐き、火の風、火の雨を降らして神代の道に殉じた、跡に残されし父母や、捨てられし未亡人

◎平野先生ノ歌
今まけしまてや都
の花紅葉御幸ある
よこなさてやむへ
き

は二十代、三十代の若後家となり、亡夫の片身を抱きて身の振方に窮し縁者故舊を便るもあり、途方に暮るゝもあり、これ等幾千の殘存者は飢餓に瀕し、杜鵑血に鳴くの比にあらず、俸給を取り爵位を貫ふて子孫の爲めにする人と、天下國家の爲めに俸給を捨て一身を犠牲に供し妻子を路頭に迷はして父子を顧みざる所謂大義滅親の人とは何れが忠臣なるべきか、殉國の士の中にも平野次郎先生や坂本龍馬、橋本左内、渡邊華山、梅田雲濱の諸先生は何れも忠誠拔群の人々である、斯く拔群の人の子孫にして、勳閥の貴に居るものあるを聞かず然れども國民は諸先生や水戸浪士の芳烈をは千萬年經ても忘れない、年を経るに従つて、光輝が現はるゝので生前に報へられざるものは死後に榮ある所以である。上得爲剝うしとくをへて示すから下に追剝が現はるゝのである故に、聖人が出づれば麒麟鳳凰現はれ、梓弓春さり來れば咲かさりし花も笑へり、鳴かさりし鳥も歌へり、夏には螢が飛び蟬が鳴く、秋には虫集く茸も出る、皆是れ氣候に促がさるゝに非ずして何ぞや、均しく之れ水、秋には澄、夏には濁る、秋

水の清きも夏てふ氣候に濁されて蚊を生じ、遂には人に迫るに至るのである花、鳥、螢、蚊、茸、水、のみならず人心も刺戟されて時に危険思想となり、或は平和主義ともなる皆之れ氣候の時つ風に誘はるのである、隨て監獄の満員も病院の繁昌も皆此時津風の按排から來る、としたなら時津風なる傀儡師か手加減一つで如何にもなるならんか。

今や言靈の幸ふ國の往還も、黄金なる外國風に吹き荒まれ、上下を擧げて黄金風の中つて居る、三大國寶の一なる言論も、身体の自由も、皆この亡八で動きがとれぬ、富國とか、強兵とかやらで我國か世界の五大國の一に列せしは尙武で、其武威も黄金で、軍備を充實するからであると云ふ然れども富國たり、強兵たることは人の目に觸るゝ數字上の計算のみにてその富國や強兵は少しも的にはならぬ、小牧山の戦に家康か一万二千の兵を以て十倍する敵十二万の秀吉の軍を破つて居る、淺井は江州の名門猛將勇士も少なからず、金持て羽振りが能くて、足利十三代か便つて大事を托した程の家柄である、然るに當時成り上りの金も無く兵も

少なく兵糧も乏しき、信長の爲めに滅ぼされて居る、幕末の長州征伐とかには尾張大納言を筆頭に二十一藩とやらの大名勢で、三方から押し寄せたが、長州勢の爲めに散々追ひ捲くられた、尤も寄手の大名勢は長州征伐なるものには腹の中では、大底反對なりしも幕府の命令であるから據ない、勢揃ひして繰り出して行きしものゝ、所謂面従腹非であるから戦争する氣は素より無く、上方見物氣取りで京都で織物や陶器類を郷里への土産にとて買ひ整ひて、戦地に向つた程で、ほんの義理一遍の顔出と云ふ格であるから奮闘して戦死でもすると、土産を持ち返つて家内の悦ぶ顔も見られぬ譯で、長州軍から鐵砲玉が届き相になると、采配振りが真先きに逃げ出すと云ふ状態だから、寄手には格別大怪我もなく大方無事に舞ひ戻つた、夫れから弘安元寇の役も、那翁か露西亞侵入も、無敵艦隊でも、皆富國強兵の數字上の計算を裏切つて居る、申す迄もなく國と國との戦争は、其國々の大靈上からの關係に由つて、戦闘以前より其勝敗は決定せられてある、故に小國も大國を破り、大艦隊も小艦隊に

破らるゝことに成るのである。

皇國は黄金万能國にあらず、尙武の國にもあらず、言論國なるを以て國防上にも言論の礎を堅く堅めて有れば外冠の患は斷して無し、この貴重なる言論の礎を斥けては舉國一致所謂皆兵主義の上に黄金の山を築き上げては國を樹つる上に於て勞苦が絶えません。「古歌に」

山ふかみ八重の逆茂木引くとも

世のうきことや尙そかよはん

言靈の幸國で、言論万能の國体であるから、内政外交國防は勿論修身齊家の末に至るまで言靈を尊重し、一切萬事言論を需つて決行する國柄であつて、何事も秘密や噤の國体にあらず、又皇國は平和を世界に貢獻す可き大使命を帯びて居るから、政黨とか、政派とかで、日比谷邊の國技館で優賞旗の爭奪戦をば後日に廻さし、八千萬男女の全胞中より力士を募りて共々世界巡業を爲して平和宣傳の大角力を興業せられよ。

晴れ渡る微明の中空より豊かに打ち下す櫓大鼓に世界の人目を醒し、全

世界十七億と云ふ男女總見の真中に於て、相手は問題の軍艦と云ふ、師團と云ふ、大砲と云ふ關取等を片端より打ち据えて、土俵の外へ押片付て、千秋樂を告げたら、豫て世界の中心地として五千年の昔、畏くも伊佐那岐尊天御柱を爲立られし、其御蹟に平和の大徽章なる、天津日の影も貴き日の大御旗を掲げられ、四方津國人と諸共に、四海波枝も鳴さぬ時津風神代隨の祝詞を奉奏も近きにあらんか。

◎倭トハ禾ト女ト人國テアル

◎我國ハ七福人ノ一ナル辨天鳴テアル
コノ紅一点ナル花
米ノ大黒、英ノ惠
比壽等ノ六福神
萬縁國カ圍繞シテ
居ルノデアアル

◎何故ニ米國ハ大黒
ニシテ英國ハ惠比
壽ナリヤ、曰ク米
ハ山ノ幸アル國テ
アルカラ大黒アル
英ハ海ノ幸アル國
フ、故ニ海比壽ト云
大成金トシテ現ニ
大得意ト大黒或テ
アル然レトモ英國
ノ惠比壽ノ如キ海
洋ノ幸ガナイカラ
ニ任セテ大艦隊ヤ
ヘテ世界ノ海上ニ
テ握ラントシタリ
又ハ太平洋ノ深淵
ニ遊泳スル長鯨ヲ
捕ヘンナド、海蜻
蛉ノ商買チスルト
天ヨリ與ヘラレト
ル惠比壽ノ受持チ
犯スカラ不時ノ災
害ガ瀕發シテ損害
斗リ重ナリ米國ノ
山ノ幸ナ全部海洋
ニ投スルコトニ爲
ツテ此成金國ノ大
黒柱ガ歪ミ遂ニハ
貧乏大黒トナル

姫

葦原の瑞穂の國は、一姫二太郎の國で何事に由らず、姫は彦より先き立ちて活動すべき國柄である。國の名を大和、倭國、東海姫氏國、女役者を御山とも云へ、山の神など云ふも必竟大和は女人の國で有つて、御神さん、御春さん、御花さん、など云ふ姫の名を呼ぶに、「御」の敬語か付く、宜なる哉、姫は平和の神の御杖代なるを以て、帝國三大國實の一なる所以である。

岩戸神樂のいとも畏き 皇大神の大稜威に、夜は明け晴れ渡りて、上代の内政、外交共に姫神達が當られて赫々たる勳功を樹てさせられて居る、然るに世は押し移りて、今より千有余年前印度洋より起れる颶風の爲めに、美人嶋根は悉く荒し廻はられ、男子を益良雄、女子を手弱女など稱して、奥へ封じ込めて奥様とし外には出さず、内方とて家を守らせ貞操を強ひ、男子は妻あり、妾あり、尙且つ公然白晝青樓に上り、高樓傾盡三杯酒とか、天下英雄在眼中とか、酔ては枕す美人の膝、醒めては握る天下の權などと邊り構はず出任せて、巫山戲散らかして女子を玩弄

し、蹂躪し、男子は不貞醜行の限りを盡くして却て世に誇る、而して女子にのみ貞操と云ふ定規を勵行して、天下一般に怪まず、男子の欲する所を女子に與へずして天下は大平なりや、夫と呼び、婦と呼ぶる、夫と婦で、男と女に分れて居る迄で、尊否の區別なきものを、向河岸の風俗に氣觸たのである、この氣觸は明治維新の大掃除に残されて脇差時代に溝察に投せられた儘にて、文明也の今日に於て動物虐待を云々する世に獨り。女子のみが浮き上がられない、或は曰く、男子には徴兵の大任を負はせてあるから、其慰藉料をも計上せざる可からずと、否然らす畏くも天地開闢の始めに當り 諾冊兩大神の間に生り出でたる、秋津嶋を守護せんが爲めに、彦には矛、姫には盾を授けさせ給はれり。
男子の矛は専ら攻客用に供し、女子の盾は専ら防禦用とし、各區分を明かにせられて居る、男子は矛を執つて攻掠侵畧に當り、女子は盾を持ちて専ら防禦の衝に當る可きが、五千年前に確立したる天則である、然るに男子の壯丁を徵發して國防の軍備に充つると云ふものあり、刀槍銃砲

◎姫ノ本靈ハ山、山ノ分靈ハ姫テ皆ナ國防靈鎮ノ司

は矛の靈より出て、攻道具である、要塞、逆茂木、鐵網條杯は盾の靈より出たる防道具なることは、世上知悉のことであるにも拘はらず、男子を徵發して侵略攻撃の軍隊を擴張するものなりとせば格別、國防上の軍備なりとせば、矛盾撞着も甚しからずや、矛の代用に盾を以てし、盾の代用に矛を以てすることは、天則上出来得べきことに非ず、然らば國防軍には盾の本靈たる女子を徵發し、所謂赤練隊を編成せんか。數嶋の大和國は女人、山跡にて山と云ふ山は姫の本靈である、姫てふ姫、山てふ山は皆これ大君の御楯であつて、常住永久に國防の大任に當らせられて居る、常陸の筑波、伊豆の天城、下野の白根、男体、上野の赤城、秩父の連山から、函嶺一帶の諸峯は即ち御親衛の靈鎮である。加賀の御前山劍峰山、越中の立山、信濃の御嶽、槍ヶ嶽、仙丈ヶ嶽、赤嶽、八ヶ嶽、甲斐の駒ヶ嶽、鳳凰山、金峰山、岩代の御神樂岳、兩羽の月山、湯殿山、鳥海山、大和の大臺原山、伯耆の大山、肥後の阿蘇山、薩摩富士、南部富士、津輕富士、蝦夷富士は申すに及ばず、全國中の高山、低

◎天皇ノ大御楯

◎三千年來「元冠ノ外」支那が強大ナスル勢力アリシ時代カ出來ナカシトハ皇國ノ諸山ノ靈威ニ打テ居ッ

◎直廬先生ノ歌ニ

我こそは
國のまつめと
あらそひたてる
天龍に
筑波甲斐ヶ嶽

山、山てふ山は皆護國干城の任に當らせられて居る、之れ等八荒の雄鎮を統率せらるゝ富士山「木花咲耶姫命」は畏くも、天皇の大御楯として東海の天に御英姿を現はせられて、天壤無窮の大勅宣を奉行せられ、苟も皇國に仇なして寄せ來る浪あらば、諸山の靈鎮に命令を傳へさせらるゝから、茲に諸山の靈は發現せられて伊吹風となりて、伊吹拂はせらるゝので我皇國には近寄ることが叶はぬ、大君の惠の海の深ければ仇浪の寄る術なく、永久に浦安の國とも言へ傳へられて居る。姫の本靈は山、山の分靈が姫である、皇大御楯、「木花咲耶姫命」を始め奉り姫と云ふ姫、山と云ふ山は皆之れ常住永久國家の干城であり、鎮護の神でもある。仇浪の寄する外冠斗りて無い、國內の騷動も起らぬ様鎮め守らせられて居る故に、戦争が起れば山の神様が仲裁すれば直ちに静まることになる、獨り助六等の鞘當斗りか、國際の鞘當にも御山か飛び出せば直くに手打が出来るものを、坊主に欺かれて奥様として奥へ封鎖し、喧嘩と火事

◎男女權ノ平等ハ眞
理ナル、明白テ
アル、惟神ノ大法
アル

場は女役者の出る幕じや無い、杯と芝居掛りで女子を度外視して居る。何故に女子を平和の天使と謂ふか、小は兄弟喧嘩から、國際談判や、大は世界戦争に至る迄、山の神なる鎮護神が仲裁に御乗出しになれば、容易に平和が克復するからである。

山の神は皇城鎮護の神にして、護國の干城なるが上に、尙一家の干城守護神でもある、此守護神の姫を輕視し玩弄し、敷石代りとし泥溝板代りとして貴重の楯を踏み付ける様では、何時迄も平和は望まれぬ。物平を得ざれば鳴るとか、争論の起る原因は不平等より來る、不平等より平等に復らんが爲めに鳴るのである。

天の迅雷閃雷や、技折る風や、大砲の音、皆之れ平等に復らんとしての響動に非らざるなきか。一家の平和は一國の平和、一國の平和は世界の平和である。世界平和の第一段は男女權の平等にあり。皇國は一姫二太郎で、何事に由らず姫が彦より先き立ちて活動するに幸ある國柄である。全世界平和の神の御杖代たらん者は皇國の姫なることを知らざるか。

現神の知らせる、大御代の平和の神の御杖代なる姫達よ、世の中に戦争と云ふ國の病の曲靈をは、大海原に持ち出されて……………根の國底の國に伊吹拂はれて……………流離失はれて……………今より争と云ふ病の種なるものは世に残らじ有らじと清め祓はせ給はれよ、斯而天の大使命を爲果せられて、全世界の萬縁に圍繞せらるゝ我、紅一点の花王國の姫達の譽を後の世迄に輝かされんことを祈るになむ。

榮水

◎酒ノ名ハ三ツアル

- 一 榮水 (水)
- 二 御酒 (木)
- 三 明 (火)

ニシテ皇國「水木」三大靈「發現」
 支那人ハ酒ヲ天ノ
 美祿ト云ヘリ
 ◎東海姫氏國ナル皇
 國ニテハ女ノ子ヲ
 代ヨリ言モ傳ヘラ
 レテ居ル皇國ハ美
 人國テアル
 水木火ノ結晶デア
 ル我國ノ山ハ明
 モ水木火カ掛カル
 カラテアル宜ナリ
 辨天嶋ノ名ニ昔カ
 ザラシメシガ爲メ
 ニ女子ハ美シキカ
 上彌羅ハシク健ヤ
 カナレト云傳ヘラ
 シナリ

日本酒は大和民族榮養の源泉なるを以て、帝國三大國寶の一なりとす。酒は『榮』の語を詰めた言葉で、中世迄は『榮水』と稱し、別名を『御酒』と云ひ、『明』とも云ふ。畏くも宮中の豊明殿は酒殿で特に御宴會の爲めにのみ御造營の御殿である、命根を奇靈の恩頼によりて成れる之の御酒は上 天神、地祇の祭典より、下一般の葬禮祝祭送迎等の年中行事は申すに及ばず、花晨月夕も無くては叶はず、百藥の長であつて憂の玉箒で、其徳たる子孫長久、國家安穩、天下大平、廣大無邊、言語に筆紙に述へ難く、盡し難きものとす、斯る貴重の酒を風教上、衛生上有害なりとて禁止税を課し、尙演舌に、新聞に、宣傳びら迄振蒔きて建國國寶の一なる(榮水)を國外に放逐せんとす果して皇國の酒は衛生上、風教上有害なりや。氣候風土の異なるに従つて各國の慣習や、衣食住に至るまで一定せざるは自然の大法なりとす、人畜虫魚は勿論森羅萬象皆其土地氣候の支配を受けざるものなく、人類の体格天稟の氣質も均しからざれば、隨て營養上も全しからず、大和の冠辭、敷嶋は『木々嶋』より轉

◎世ノ中ハ弱食強食
 ニハアラズ萌エ出
 ツルハ枯ル、ノテ
 アルハ枯ル、ノテ
 國ハ酒ヲ飲メバ枯
 レテハ弱ク皇國ハ
 酒ヲ飲マザレバ
 エテ強カラズ

じたる語で、木が能く立つ國で、木は『氣、酒、生』に通して全靈である。家屋は木造、衣服は袖口を寛闊にして、何れも通氣を良くせんが爲めに出來て居る、土藏は通氣が不充分なるより、倉庫なれば格別住居にはするな、筒袖や襯衣の如き矢張り通氣の充分ならざるものをば着るな、砂糖や獸肉は土氣を含むこと多量なれば、大和民族の營養にはならぬ、身体を汚し、病氣の因となり、早老の基となるから成る可く喰はぬ様にせよと、斯く衣食住共に通氣と云ふことに、吾人の祖先は頗る注意を拂はれたるもの、如し、之れに反して歐米の風土氣候に相應したる洋館、洋食、洋服、は我國の氣候風土の上にある大靈と順應すべきか、氣候風土の異なるより、其國々の大靈皆全しからざる所以なること素より論を俟たず、均しく之れ水と云ふ水にも淡鹹あり、一部の淡水中にも河川湖沼あり、流水あり、滞水あり、全一なる川の流れにも、上流、中流、下流、と清水と濁水とに分れ、魚族の群も全一ならず、瀬に付く鮎、藻に棲む鮒、泥土に匿くる、鯰、鰻、鱒との如く全一水流中の魚族すら食

◎大國ナル米國ハ禁酒ガ大靈上ヨリ至當デアアル
◎皇國ノ禁酒ハ神明ノ違フカラ子孫ガ榮エズシテ枯ル、我國ノ家庭ニ榮ルヲ斥ケテ子孫ノ繁昌スルモノハ斷シテ非ス

◎我ハ生水ニ遊フ鮎テ某ハ泥水ニ育ツ鮎ハ生水ニ育ツ鮎ハ泥水ニ育ツニ相異シテ居ル

餌は全一のもの斗りにあらず。況んや洋の東西氣候風土の大に異なる民族の營養上に於けるも又然り、然るに某國に於て禁酒するから、我國も従つて禁酒せよとは何事ぞ、某國の大靈よりせば某國の酒は我國の砂糖に當る、某國の禁酒は其國魂上より至當である。我國は某國の酒に當る砂糖をば禁止し、酒は營養の根源をなしつゝ有ものなれば、獎勵せねばならぬ筈である。

卑俗に云ふ『下戸の建てたる倉は無し』と云ふ如くに又某國にての上戸は税が上からずと全一理で……某國が禁酒するから我國も之に従はねば爲らぬと云ふことはない、又我國は氣が主で、某國は食が主である、川の流れとせば我國は上流で上戸の國で、某國は下戸で下流の國である、魚族とせば我は鮎て、某は鮎、鰻の類である、鮎は生水を吞吐し僅かに苔蘚類を嘗めて、狭走り遊ぶに忙しい、鮎は濁濁水に居て下水尻より落ち込む汚物や、他の小動物や、腐敗物を手當り次第に喰ふ、鮎は遊ばんが爲に生き、鮎は喰はんが爲に泥濘中を蠢動し、餌を貪り喰ふ

◎鮎ハ生水ニ育チ鮎ハ砂糖ノ泥水ニ育ツ

◎日本ハ世界一ノ壽老人國デアツタ

◎病氣ノ數モ國ノ數ルカ萬國ト往來スルコトニナツテ萬病トナレリ

◎世ハ文明トナリテ衛生思想ハ進歩セリト云フモノアリ然ルニ我長壽國ハ世界ノ病人國トナレリ早暈國トハナレ

て飽くことを知らず、鮎は精神的に、鮎は肉慾的に、鮎は友の情に靡き食餌の利を顧みず、鮎は貪婪飽くを知らぬから餌の利で誘ふことが出来る、鮎が上流の清水を去つて、鮎の住む泥水の場所に遊べば快活の氣が乏しくなりて困殺る之れと全理で、鮎が下流の泥濘から上流の生水の所に移ると姑くして骨と皮斗りになる、鮎には生水の酒系が害で、鮎には泥水の砂糖系が毒である。

御酒の國の大和民族が砂糖國の榮養を承はつたから、世界一の病人國と爲つたのである。昔しは病氣の數も六十餘種とかで、支那と交通してから彼の國の四百餘州に倣ひ、四百四病と言ひ來つたが、萬國と交通する様になつて病氣の數は實に壹万有千五百二十種にもならんかと云ふものあり。文明とは單より復に、粗より精に、之くの謂なりとのことなれば病氣の種類の万以上に分類せらるゝに至りしは、頗る文明の域に達せしものゝ如し。何れにせよ病氣とは氣を病むのである、氣を病むとは第一其土地の大靈の氣

◎大和民族ハ風ノ子
ナリ、氣一方ノ風
ノ子ハ流感ニ罹
ナドハ斷シテナイ

◎瀨ニ付ク鮎ト大和
民族トハ生水ニ育
テ上テラレテアル

◎生水ニ育ツタ鮎ノ
子モ布袋ノ腹ノ如
クニ喰ヒ脹ル、時
代ナリトハ噫

◎斯クシテ鮎ノ子ハ
風教上道徳上ノ食
中リハセメカ

◎鮎ノ國ニアラサ
レハ肉ヤ砂糖ノ營
養素ヲ攝取スレハ
スル程笑ヒ上戸ガ
泣キト戸トナツテ
病院ガ親シクナル

◎倭姫命御壽五百十
九歳

に順應せざるか爲めに起るのである、我木々嶋の『氣、酒、生』は皆全靈
で木は又震巽に分れ、巽は風にして邦人を風の子とも言へり、此風の子
が全氣なる風を引き込み、又は流感に胃さるゝとは何故なりや、『木、氣、
酒、生』生水に育て上げられし鮎の子か、砂糖系の泥水を呑むからである
。精力と氣力が充滿して居れば風を引いたり、流感に胃さるゝ筈がない
、又大和民族が鮎と似通ふて居るのは、大祓の祝詞に『佐久奈多利水落瀧
津早川の湍に坐す瀨織津姫命』瀨織津姫命は畏くも 皇祖皇太神の又の
御名にて、瀨に付く鮎も、大和民族も、皆 皇太神の高き、廣き、遠き深
き、厚き、恩頼みたまのよを蒙りて生成して居るのである、生水の鮎が泥水の國
の榮養學を研究する斗りか、政治も、道徳も、宗教も、一切萬事泥水世界
を模型として居るから、從來餌の利に靡かざる性質の鮎の子も、鮎化
して喰込み主義となり、金持の垢を嘗めたり、砂利虫を喰ふたり、軍艦
や汽船の底に生いた苔を嘗めたり喰つたり、大官虫、爵位虫、勳章虫等
手に届き足に觸るゝものは皆之を喰ひ込むで食中りもせず、風教上道徳

上などは少しも頓着なく、取れ、喰へと云ふ規則か立てられてあるから
喰ひ抜くことも、呑み込むことも、彼れ是れと咎むるものも少ない、併し
鬼神は承知せぬから万有千五百二十の精菌を宛行あてがるゝのである、所謂榮
養素の豊富な食物などは体養法にして我民族の精力、膽力、氣力、の榮
養とならざる而已ならず、却つて養氣の妨げとなるから我民族が無病壯
健ならんには、鮎國にて滋養物と稱せらるゝ、飲食物は、悉く排斥する
にあり、而して大靈上よりの壯健法は
第一我國は養氣の國であるから、食物は一汁一菜で充分なのである、一
汁一菜の飯を甘く喰へぬときは、甘く喰はるゝまで斷食するも宜し、料
理の按排で口に適する様にしたたり、砂糖や肉の嚴物喰は斷じて不可なり
。晝食杯は食せざる習慣になすも可なり。折々飢餓に近づくのが不老の
神に援けらるゝと信じて疑はぬが宜しい。本年伊勢の山田に別格官幣社
として奉祀せらるゝ『倭姫命』は垂仁帝第二の皇女にして、崇神天皇五
十八年に御生誕、雄略天皇二十三年春二月に、御壽五百十九歳にて薨去

◎空腹ノ許ニ不味モ
ノナシ

◎口孝行者ハ屢病院
ノ雪隠ニ入ル辭ヲ
覺ユ
◎泥水國ノ貴重品ト
ハ砂糖デアアル
◎生水國ノ貴重品ト
ハ酒デアアル

◎日本酒ノ徳ハ言語
ニ筆紙ニ述ヘ難シ
靈シ難シ

◎醫者ト坊主ニハ逸
樂ノトキニ接近ス
ル

◎醫者ト坊主ニハ勉
メテ接近スルナ

せられてある、畏くも皇祖 皇太神の御杖代として御一世中御奉仕せられた御一世中、物忌を遊ばされて召上りものが極少量で在らせられた、晝食は勿論召上がられなかつた、婦人方が御物忌様として崇拜する神様で御存生中四百五十六十年間は御容子が、十七八歳位の御娘姿で少しも御變りが無かつたので、婦人達はこの神様に觸似度して祈誓するのであるが腹一杯飲腹一杯食ふのでは御信心が届かぬのである……三度喰ふ飯の從來の習慣を改むるも容易ならずとせば、あと一杯と云ふところを控ふるのも良からん、腹八分と云ふ豫算を實行するやうに習慣を付けるも宜しい、何も覺悟である斯くして腹一杯に飲まず、食はず、美服も纏はず、一生働き通して人生の快樂てふことも知らずに靈火を返上すとは無情の極みならずや、杯云ふものあらんも所謂營養豊富なる土性の食物は我とは背反す、我國は肉慾的の國にあらず精神的の國であるから鯨鰻の美味厚味は欠くも、鮎の香氣の高き國である、眞味にして不老長生なる養氣の源泉を持つて居る國である『古歌にも』

言はんすへせんすへしらにきはまりて
たふときものはさけにやあるらん

第二は成る可く寒さと闘ふにあり、人は眞裸で生れて居るから赤裸で終始すへきが自然である、天則である、然るに土手行きは寒からんとて襦袍を貸し、轉寢をしようと風を引くと云ふて蒲團を掛ける、余りに人情どかに驅らるゝから却て衛生的にならぬ、夏は暑を日光に避け、冬は熱海に寒を除け熱いときは木影で風の吹き通しの良き處、冬は炬燵と脛押などは矢張り逸樂的で衛生的にあらず、着物を重ねて風を引かぬ様にし、忍び返しを設備したり、嚴重に戸締りをしたからとて盜賊の心配なしとせず舉國皆兵主義で國防を充實しても外冠は免かるゝことが出来ぬと全じて又裸でも風を引かぬ証據は人々の面部から風を引いた例を聞かぬ、軍備も充實し過ぎると厚着をして流感に罹ると一般で、必ず内憂外患は免かれ難い、人は赤裸で生れ赤裸で終始すへきことを、神は人に教へたるにも拘はらず人は色々の細工をする、神は人に熊の爪や狼、虎の如き牙や、龍

◎人ハ猛獸ノ角、牙、爪、ヨリ一層偉大ナル武器ヲ有ス此利モ人間同志ニハ見エス
 ◎人間ノ武器ハ一ツアルト云フ靈光デ天津橋上敵兵百萬ヲ睨ミ返シタ張飛モ神皇皇后ノ三韓ヲ言向ケセラレシ折一矢ヲ放タザルモ三韓王ハ屈服シタアルモコノ荒靈デア

の角の如きものを與へぬからと云ふて、角の代りに槍を作り、爪や牙の代りにサーベルを作る、人には武器なるものを天が與へざる爲めなるかと云ふに然らず、大に與へられて居るのである。人には熊、狼、虎、龍、の爪、牙、角より一層威力ある、武器を與へられてある、之の人間の武器は猛獸には見ゆるも、從來人間全志には見えぬから猛獸の爪、牙、角杯を真似てサーベルや槍を作つたものであらう、厚着をせずとも風を引かず人体に風を引かぬ靈力があると全しく、國にも國を護る靈力がある那翁の精英が用をなさぬも元冠が矢張海底の藻屑となつたも、息長足姫命の三韓を言向けせられて流血を見ず、一矢を放たずして鴨綠江は北へ流れ、河石が昇つて星となるに非らざれば、春秋の朝貢を欠かじと誓はせて、三百四十有余年の間朝貢を絶たざりしも之れ有るが爲めである。猛獸が人を恐れて避けるのも又反噬するの人も、人が猛獸を壓迫するとか撲殺せんとか、人の意志に害意があれば、彼れは正當防衛に出つる、又人に害意がなければさつさと遁逃する、猛獸すら靈感があるから此方の

◎人間ノ武器ナル和民族カ天ヨリ特ニ多クナラヘラレ格ヤ皮膚ノ色ナル外見ガ歐米人ヨリ見劣ツテ居レバツテ居ル一言ヒバ五尺ノ小軀ハ皆之ヲ酒ノ國テ氣ノ國テアル

意一つで向つても來る、又逃げもする、赤裸で生れし人類が天意に悖つて強て獸類の毛皮を剥き取りて之を冠り、纏ひ、穿つ、之れが文明國の作法で裸体で表に出られぬから勢ひ、身体を巻き過ぎ國を堅め過ぎて自然に遠かり、流感に罹り國難に逢ふ、人間自から招くのである、之を招きて又之を厭ふ、低窪に居りて濕を厭ふと一般ならずや、斯る見易き道理を分らぬ迄に上下一般溷濁氣分に襲はれたるは、鯨鰻國の泥水學說に生水の鮎の子が困殺せられたのである、葦原の端穗の國は惟神言舉せぬ國とある。現代の學校制度は我國魂の礎の上に立てられたのであらうか。

中々に人里近くなりけり

余りに山の奥を尋ねて

と云ふ極く粗末な掛物が生の手元にある、讀人不明だが余りに深入するなどの謎でもあらふか。

兎も角我國の大靈上からせば寒に耐ふれば耐ふる程精力が加はり、熱さ

◎明治天皇御製

あつしきは
おもはさりけり

水田にしつのは
煮文かへる

立つをおもへば

◎景樹翁ノ歌ニ

岩かれの

なれぬ枕も

いたはりしものを

蜂の松風

(野宿シテ寒サニ
耐ヘサル恨ミカ)

◎避暑ヤ避暑ハ二日

方三日位ノ骨休メ

シ其レ以上ハ不可

に耐ふれば耐るほど氣力が加はる、精力、氣力が増進すれば無病となり不老となり長生となる。

反之冬も寒からず、夏も熱からざる、避暑避寒とかは氣候と抵抗せぬから精力、氣力の補充が無き理にあたり、外冠なければ内憂起ると一般逸樂者に免かれぬ性慾熱が高まるから精力、氣力を減耗する斗りである、西王母が武帝の長生法に答へて愛精閉氣と云へるが如く、必竟粗衣粗食の貧乏人が健康で、營養素の多い美食や着心地の良い美衣を纏ふ金持が多病で、早老で、天死する道理になるのである。

第三忍耐し得らるゝ限りは醫者に近寄る勿

病氣は氣を病むのであるから營養や薬餌でのみ治療することの出来ぬのが天則であるから病人は昔しから治るものと、治らざるものとあり。治らぬ病人を醫者が治した例しは無い、治る病人を醫師か手傳つて治すまでなれば醫者に掛らすとも治る病人は治り、治らぬ病人は醫者に掛つても治らぬのであるから、忍耐の出来る限りは醫者に近寄らぬ方が宜しい。

◎四人ハ病人テ病人
ハ四人ト云ヘ換ヘ
テモヨロシ

◎慈善方面ハ別トシ

この我國は佛教渡來前迄は一般長壽者が多く在つた時代に、醫者と云ふものは無かつた、病氣に爲るのは一口に言へば心の曲りである、目に見ゆる罪を犯せば官人の手に掛りて監獄に送られ、目に見えぬ罪を犯せば鬼神の手に囚はれて病院に投せらる、監獄は表門で、病院は裏門である。表門は陽性の曲靈が出入し、裏門は陰性の曲靈が出入す、何れの門内にも曲を直す道具も人を惱ます器械も整理して居る、世には表門を潜るをのみ耻辱とし、裏門に通るものには全情があるけれども、鬼神に憎まれて居るから食物が甘く喰へぬ、又表門收容者は人は憎んで居れども鬼神は疾視して居らぬから食物は挽割飯でも甘く喰へる、表門裏門何れの門に入るも元を糺せは心の曲りであるから双方とも病人である、罪人である、然るに一方は國庫で支辨し、一方は國立、府縣立、町村立、私立なとゞ分れて待遇が一定して居らぬ、一方は懲治で、一方は療治である。一方は懲治料を徴收せずして、一方は療治代を請求する。一方は無錢でも入監するが、一方は無錢では入院が出来ぬ。一方は金を以て門を出て

寒チ厭ハス、暑チ厭ハス、コノ中ニ
 自然ノ健康法ハ含
 マレテ居ルカヲ賣
 僧ノ云フ事ヤ醫者
 ノ嘶シニ耳ヲ貸サ
 ×ガヨロシイ
 寒イ折ニ寒イ思チ
 ナシ暑キハ暑イ思
 ヒチナスガ天恩ニ
 浴スルノテ即チ大
 靈ニ順應スルノテ
 アル之レニ反シテ
 避暑避寒ハ大靈ニ
 逆行スルノテアツ
 テ天恩チ蒙ラヌカ
 ラ折々四十度以上
 ノ体温ヲ此体温湯
 ノ三助ガ繁忙ナリ
 ノトハ所謂衛生思想
 ナリヤ

◎中心國
 全世界ハ万緑國中
 ノ紅一点國ハ我皇
 國ナリ、我皇國ハ
 世界ノ中心國デア
 ル又皇國ハ長クモ
 カラ皇國ト云
 フノス迄モナク皇
 國ノ中心國ト五
 千年前ノ昔ニ…
 正決定メラレテ
 アル

一方は金が無ければ入院されぬ。一方は貧乏でも金持でも招致し、一方は多く金持を歓迎す。貧乏人は救はれないのであるから少し位氣分の悪い位は貧乏人氣分になつて可成醫者に掛らぬが得策である云ふのは不自然な治療法であるから、一層早老早老の基となる斗りて無く鯰鰻系の營養法なる砂糖本建の國の大靈から割出した學說に促はれたる先生斗りであるから、酒系國の病人には総てが仇となるのである。現在の醫者でも漢法醫でも、病氣の治療上には多少貢獻せられたらんも、之れ有るが爲め却て大和民族が早老早老に導かれつゝあるは明かなりとす。所謂早老早老は申す迄もなく、其原因國の大靈に反抗するより來るので、精力と氣力が旺盛なれば、寒胃や流感には罹らず國としても國民の精力、決斷、氣力が充實すれば軍備は無くとも外冠の侮を受けず。斯く爲さんには國の大靈に順應すれば宜いのである。蓬萊嶋の昔に復り無病長命となり、浦安の國とやらには、佛教渡來以前の所謂神代隨の道に復するのである。水木火の三氣を稟けたる大和民

族は寒にも耐へ暑さにも耐へらるゝから、世界の何の國に行くとも僻易することなき筈である、余りに外國を模倣し信仰し過ぎるから、不知不識の間に國の大靈に背向された爲め体力能力も皆な劣等になつて仕舞つた、破廉耻や不徳義をしても制裁さへ受けずば立派なものだ迄に成り下つた病人迄を療治せんには、現在の監獄と病院では追付かぬ、斯る現狀を廓清せんには現代の政治、風俗より食養上に於ける大掃除大清潔法を徹底的に斷行するにあり。先づ其の第一着に養氣の根原なる、酒造税を全廢するにあり、之に代ふるに多年我民族を蠶毒しつゝある土性の食物に重税を課するにあり。而して從來の日本酒に現今の如き他の混合物あるを嚴禁し、酒の釀造方法により、甘口にも適するものをも釀造せしめて、上下男女老幼の別なく一般の飲料となすに至らば、幾年ならずして世界一の病人國は、世界一の長壽國となり、延て世界の戰爭病も根治するの基となるのである。日本酒は精力、膽力、氣力の結晶なる大和魂の本靈と全靈なる水、木、

終